

氷見消防署見学

6月19日(水)、幼年消防クラブの集いが氷見消防署でありました。阿尾保育園は、年長児3名が参加しました。はじめに高岡消防署楽団の演奏と踊りがありました。その後、子どもたちは放水体験に歓声をあげたり、消防車や救急車の説明を熱心に聞いたりしていました。



救急車の内部



ヒラメの放流

6月24日(月)、梅雨に入り曇天の中、阿尾の浜でヒラメの放流が行われました。

滑川栽培漁業センターで2cm位までに育てた約4,000尾のヒラメを放流しました。参加者は、阿尾保育園の年中・年長の園児11名と、氷見漁協、栽培漁業センター職員、阿尾漁業管理委員会の人でした。子どもたちは、ヒラメに触れ、口々に「大きくなれ」と言って放流していました。



パパ・グランパのつとめSummer

7月6日(土)、島尾キャンプ場や周辺の海岸で地引き網体験がありました。市内の保育園から園児やその父親・祖父が約60人が参加しました。最後に大漁鍋をいただきました。

育児では、「威圧的な態度でしつけをするのではなく、一緒に遊ぶことが大切である」ということを学ぶ貴重な機会でした。



*公民館主事の独り言

※「自信をつける習慣」 内藤誼人著 明日香出版社 参照

私たちの心は、自分がどのような姿勢をとっているかによって影響を受けます。

背中を丸めて、うつむいていると、自信家の人だってどんどん自信がなくなっていくますし、逆に胸を張ってアゴを少し上げぎみにすると、どんどん自信が出てきます。

自信がない人は、背中を丸めて、姿勢が悪いから自信が出てこないという可能性があります。

背筋を伸ばすだけでなく、ヒーローがやるように、腰に手を当てて胸を張ってみたり、威張ったポーズをとってみたりするのです。



カリフォルニア大学のダナー・カーニーは、そういう威張ったポーズをとらせると本当に自信が出てくることを確認しています。カーニーは、威張ったポーズのことを「パワーポーズ」と名付けています。

カーニーによると、パワーポーズをとっていると、自然とテストステロン値も上昇してきたそうです。この数値が上がったということは、やる気や活力や多幸感が全身にみなぎってきたということです。

「パワーポーズ」は、見た人を不快にさせることもあります。人の目に付かない場所でする等の配慮も大切だと思います。

○ 8月の講座案内

講座名	曜日	開設日	講師・責任者	時間	部屋
生け花 (池坊)	第1・3水曜日	7日 21日	西山栄津子	10:00～ 14:00	洋室
かな書道	第1・3月曜日	5日 19日	猶明 光華	13:00～	洋室
学童茶道& 百人一首	毎週木曜日	1日 8日 15日 22日 29日	学童支援員	15:00～	和室
手芸	第3火曜日	20日	伏木あい子	13:30～	和室
潮華会(新舞踊)	毎週土曜日	3日 10日 17日 24日 31日	大野 朝子	19:00～	和室
潮月会(新舞踊)	毎週金曜日	2日 9日 16日 23日 30日	大野 朝子	13:00～	和室
囲碁サロン	毎週月・水曜日	5日 7日 12日 14日 19日 21日 26日 28日		13:30～	和室
フラダンス	第1・3月曜日	5日 19日	東軒みさ子	19:00～	和室
常磐会書道教室	第2・4土曜日	10日 24日	名苗くみ子	10:00～	洋室

○阿尾公民館からのお知らせ

・阿尾・指崎ともに、8月はふれあいランチはありません。

○おらっちゃん風土記 (人物編)

浅野総一郎

NHK「知恵泉」、「氷見の先賢」氷見市教育委員会編 参照

総一郎は、1848年(嘉永元年)藪田村の医家に生まれた。6歳のとき、氷見町の医師宮崎家の養子となった。

総一郎は、勉強の嫌いな少年であった。いつしか、加賀の豪商銭屋五兵衛のはつらつとした姿に憧れていった。

15歳で商売を始めた。織物、醤油、脱穀機の販売・レンタル等であったが資金が続かず、高利貸しに手を出し破綻してしまった。

1871年(明治4年)、総一郎は、逃げるようにして東京へ向かった。

東京で暑い時期に水に砂糖を溶かして売り歩いた。この経験で「価値を見い出せば商売になる」ことを学んだ。

27歳で石炭の販売業に手を出す。強盗にあたり、もらい火で家が火事になったりして無一文になった。

そんなある日、横浜瓦斯会社が石炭ガスを製造した後の産業廃棄物のコークスの処分に困っていることを知った。それを知った総一郎は、研究者に頼み、コークスの利用法を調べてもらった。そしたら、コークスも灰になるまで燃え切ることが分かった。



コークスは、セメントを燃やす燃料として使えることを知った総一郎は、「この世にできた物で、無駄な物があるはずがない」と考えるようになった。

神奈川県知事から道路に小便をする者が多く、この排泄物を何とかして欲しいと相談を受けた。総一郎は、63箇所便所を作り、集まった糞尿を農家に肥料として売った。総一郎は、「日本に於ける共同便所の開祖」と自称した。

官営のセメント工場が経営不振から払い下げられることになった。三井や三菱の大財閥の有力者が競争相手では勝ち目はなかった。そこで、渋沢栄一に推薦してくれるように頼み込んだ。渋沢栄一は、かねてから、従業員任せにせず率先して働く総一郎を見込んでいた。渋沢の支援により、総一郎に落ちた。その後、インフラの建設ラッシュもあり、日本最大のセメント工場になった。

また、大正2年から15年間かけて、総一郎は横浜市鶴見区と川崎市の沿岸を120万坪を埋め立て、京浜工業地帯の礎を築いた。

総一郎は、富山県内では1925年当時東洋一の小牧ダムを造っている。地域や国に尽くした「九転十起」の人生であった。こんな素晴らしい人が氷見市の出身とは誇らしいことではないか。